

事業名	新型コロナウイルス感染対応緊急支援助成 「支えあう多様なコミュニティづくり」事業 第1回集合研修報告書
開催日時	2022年 6月 19日(日) 10:00~17:00
会場	熊本 YMCA 本部
目的	各実行団体が助成事業を実施する前にその必要性や妥当性を判断(事前評価)するために、アドバイザーやプログラムオフィサー、他の実行団体とともに各事業計画等のさらなるブラッシュアップに取り組むことで、各事業をスタートできる状態にする
参加団体	<p>グループ①NPO 法人せいしとらんし熊本／子育てネットワーク「縁側 moyai」／子ども支援活動ボランティアグループ ゆめの絆∞わらびがみ(童神)</p> <p>グループ②NPO 法人 NEXTEP／株式会社 南阿蘇ケアサービス／一般社団法人フミダス</p> <p>グループ③一般社団法人オルタナ／「やっちろ保健室」運営協議会／一般社団法人 sol ／ワールドフレンズ天草</p> <p>参加人数:会場 28 名・オンライン6名程度 合計 34 名</p> <p>※会場では検温・体調チェック表記入済</p>
PO・アドバイザー	<p>プログラムオフィサー:河合 将生・中村賢次郎・宮原美智子</p> <p>アドバイザー:五味 真紀・中山 勇魚・三島 理恵</p>
スタッフ	中村賢次郎・宮原美智子・小田川望・本多清美・久保 智絵美・小笠原 晟一
内容	<p>●スケジュール:</p> <p>10:00-10:05 主催者あいさつ</p> <p>10:05-10:15 助成決定証書の授与</p> <p>10:15-10:20 写真撮影</p> <p>10:20-10:30 今日のねらい&amp;進め方の共有</p> <p>10:30-10:45 1 団体目:子ども支援活動ボランティアグループ ゆめの絆∞わらびがみ(童神) 【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>10:45-11:00 2 団体目:子育てネットワーク縁側 moyai【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>11:00-11:15 3 団体目:「やっちろ保健室」運営協議会【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>11:15-11:30 4 団体目:NPO 法人せいしとらんし熊本【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>11:30-11:45 5 団体目:一社)フミダス【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>11:45-12:00 6 団体目:NPO 法人 NEXTEP【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>休憩(昼食)</p> <p>13:00-13:15 7 団体目:株)南阿蘇ケアサービス【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>13:15-13:30 8 団体目:一社)sol【15分=発表 10分+質疑 5分】</p> <p>13:30-13:45 9 団体目:ワールドフレンズ天草【15分=発表 10分+質疑 5分】</p>

	<p>13:45-14:00 10 団体目:一社)オルタナ【15分=発表10分+質疑5分】</p> <p>14:00-15:00 <b>実行団体が行う事業評価について</b>          (支えあう多様なコミュニティづくり支援事業)【60分】          講師:office musubie 河合将生氏</p> <p>15:00-15:05 <b>グループワークについて説明</b></p> <p>15:05-15:15 移動・休憩【10分】</p> <p>15:15 - 16:20 <b>グループに分かれて「事業が目指すコミュニティづくり」について考える【65分】</b></p> <p><b>グループ①</b>(担当:PO 宮原&amp;アドバイザー三島・事務局久保)          団体: 子ども支援活動ボランティアグループ ゆめの絆∞わらびがみ(童神)・          NPO 法人せいしとらんし熊本・子育てネットワーク縁側 moyai</p> <p><b>グループ②</b>(担当:PO 中村さん&amp;アドバイザー中山・事務局本多)          団体:一社)フミダス・NPO 法人 NEXTEP・南阿蘇ケアサービス</p> <p><b>グループ③</b>(担当:PO 河合さん&amp;アドバイザー五味・事務局小田川)          団体:一社)sol ・ワールドフレンズ天草・一社)オルタナ・やっちろ保健室運営協議会</p> <p>16:25-16:50 <b>グループワーク(気づきや学び、感想今後のアクションなど)について全体共有</b>          グループ発表【15分】アドバイザーからコメント【10分】</p> <p>16:50 - 17:00 <b>今後のアナウンス等【10分】</b>          ・広報について(実行団体の広報・団体取材など)          ・毎月の報告・フォローアップについて          ・今後のスケジュール</p>
<p><b>全体会質疑応答</b></p>	<p><b>【子ども支援活動ボランティアグループ ゆめの絆∞わらびがみ(童神)】</b></p> <p>河合: 事業実施に向けて、またこれまでの活動への想いがあふれるスライドだった。コミュニティをどうとらえるか。自分たちだけでなく様々な関わり方をしてくれる人たちや関わりかたについて見ていきたいと思った。評価の話について。事業実施の過程で地域の理解は高まっていくとあるが、関係性の中でおかげ様、お互い様の意識がはぐくまれることでどのようにコミュニティが変わるか。またどのような指標でそれを図りまた把握していくのか、具体的な事例や場面などを聞いてみたい。</p> <p>木原: これまで自身が抱いていた思いを発信することで、集まってきてくれた思いや他者からの気遣いがえられた。自身の小さい頃にもそういった支え合いの関係や、やり取りは日常的にあった。それが現代においても日常的に存在できれば、そのようなお互い様のコミュニティづくりができるのではないかと。他者を気にかけてくれる人やその関係性について。児相への通報まではなくてもあの家庭、ちょっと普通ではないよねといった、気にかけてくれる存在がコミュニティづくりのきっかけになると考えている。具体的には顔見知りになる。気にかけてくれる間柄になるということ。</p> <p><b>【子育てネットワーク縁側 moyai】</b></p> <p>中山: すでにたくさんの団体・自治体と連携し良いネットワークが出来上がっていると思う。気になった点は、今どういった組織で運営方法をとっていて、今後法人化などどのように考えているのか。法人化や組織整備などについて。最初は主体的に動いていても、組織を継承していく中で段々と一部のメンバーに負担が偏り組織整備の必要にせまられる。</p> <p>小野: 今は職員というものはおらず全員がボランティア。そのうちの一部のメンバーに仕事に等しいほどの負担が発生していて、それを思いだけで継続してきたような10年間だった。そのあたりの基盤整備を法人化も含めて今回見直していきたい。</p>

中山：居場所とはそもそも何か。いるだけでよい場所。そこにつながりを求める人もいれば、何もなければ行くという人もいる。自由な、いろんな人が参加できる居場所と、一部の運営メンバーに過度な負担がいかないようにというバランスをとることが重要で、一年かけて基盤整備をしていかれるとよいと思う。

五味：人が増えれば増えるほど組織をどうまとめるか、また運営に関わるメンバーがその人らしく活躍していけるかが大切だと思う。先駆的な取組みとして、横浜市にあるこまちぷらすカフェさんの運営方法など、学ばれてみてもよいと思う。

#### 【「やっちょろ保健室」運営協議会】

三島：内閣府調査で、コロナ禍で人と直接会う機会が減った人が7割、孤独感も、相談相手がいる人と、いない人では8倍開きがあることがわかっている。そんななかでつながりづくりの活動をされるのはありがたい。10ヶ月の中で、基盤強化を実装されていくと思うが、事業を進めながら、幸福度を上げていくお話があった。基盤強化については、事業・組織・財源の三つの成長を進めていけると良い。幸福度は何を測るのかについて、何か考えていること、測る指標があったら教えてください。

蓑田：幸福度の指標は熊本県立大学の先生に指導いただくことになっている。幸福度を見える化するエビデンスのある指標があるとのことなので、それを使って評価していきたい。

三島：ニーズ調査をしながら、というのは、事業設計としての初期値を把握していくことになると思う。

五味：素晴らしいと思った。ニーズ調査をされているところがすごい。自分自身もそういう活動をやっている。ニーズ調査するのは大事だと思う。支援を必要とする人と、支援をできる人とのマッチングがとても難しいが、どのようにマッチングしていくかは考えているか？

蓑田：ニーズ調査したあと、マッチングしていくことが難しいと感じている。自治会長や民生員が地域の中にいるので、そういう方々の持つ人間関係を使って、その方が何を望んでいるのかを一番大切にしていって、関係各所につなげていく。まだ見える状態にしていないので、それが課題だと思う。

#### 【NPO 法人せいしとらんし熊本】

河合：講座の形式をオフラインとオンラインにすることについて、その組み合わせ方や、やってみるとどちらが有効か、また事業をすすめるながら誰に対してどのような有用性があったのか聞いてみたい。特に子ども達に対してはどちらがより有効なのか、実施していく中で気づきの部分が出てくると思う。絵本配布の取組みやねらいについて、オンラインオフラインの組み合わせもそうだが絵本だから得られる良さもあると思う。手に取った人にどのように感じてもらうか、こちらの意図するとおりに使ってもらえるような工夫はされているか。

松元：チラシでどういうことが書いてあるか、どういう内容なのかを明確にしたうえで手に取ってもらいたいという考え。大人向けの伝え方を伝えたくて作成している。

中山：性教育は日本が遅れている分野で、また世界的にも必要とされている分野である。デンマークでは教員養成課程で性教育を模擬授業でしていた。日本での性教育の特徴は、子どもに視点を当てて、子ども自身を尊重しての取組みとなっている点だと思う。ただそれは普段の生活の中でも当然大切にされることなのだが、現実には子供の権利を尊重されているとはいえない。子どもへの伝達や教育については、子どもが嫌がることを無理強いせず、大人が様々な変化にも敏感に受け止めてあげることが必要であろうと思う。またそうした考えを子どもを取り巻く大人にもきちんと伝えていくことが必要で、そういった視点も心に留めておいてほしいと感じた。

#### 【一社）フミダス】

三島：高校生が就職希望1社しか出せないのは初めて知った。この事業を10か月後にどう継続していくか、ということがこの10か月間の中でも大事になってくると思うが、出口戦略として具体的にどう考えているのか聞きたい。

濱本：人吉に関しては、ユースセンターを立ち上げる話が出ており、職業訓練や若者たちのキャリア開発になるような会社を立ち上げていこうと、人吉市や地域の企業と相談している。そこを立ち上げて、引き続き若者のキャリア開発を継続していこうと考えている。熊本市に関しては、TSMCの進出に伴いモノづくりの分野の人手不足の話がよく聞かれる。行政や商工会でも事業としてやっていきたい意向が

あるので、今回の事業をモデルケースとして、次年度以降、行政の事業とするか商工会の事業とするかは、まだ検討中ではあるが、いずれにしても継続していくという方向で話を進めている。

三島：1000万規模の事業は行政や企業との連携が前提であっても、なかなか大変な部分もあるのでお聞きした。今後いろいろ教えてほしい。

五味：発表を聞き、良いなと思ったのは、高校生大学生のキャリア形成をするうえで、ありがたい姿を実現するという点、夢ということではなくありがたい姿を後押しするという意味で素晴らしいと思った。継続については自分も心配だったが、ユースセンターなどでうまく回っていくといいと思う。職業体験については、子ども達がどんな仕事があるかわからない部分があると思うので、地域の人たちに協力してもらいながら、実際の仕事の説明や体験ができ、そこで地域とのつながりもできればいいと思った。自分の周りでも、実際昨日、IT関係の会社の人から、子ども達にオンラインの仕事でどんなことができるのか話したいという提案があった。地域にもそのように子ども達に教えたいという人もいると思うのでうまく協力できると思うが、そういう具体的な活動内容は考えているのか？

濱本：企業をどう開拓していくかは大事だと思っている。また、高校では(授業が)忙しいので、インターンシップにも1週間などの時間をかけられない。1日か2日が限界で、実際には希望のところに生徒が1日2日行って、戻って感想を書くだけというのが現状。そこで今先生と相談しているのは、インターンシップに行く前のマインドセットと終わってからの自己研修の機会を作ろうということ。事前にその会社がどんな顧客にどういうものを提供し、どんな社会にしていきたいと考えているのかということ調べてから実習に行くように。学校に帰ってからは、実際にその部分がどうだったのか？自分自身はどんな仕事をしたいのか？どういう社会を実現したいのか？ということをしっかり考える研修をするだけでも、ずいぶん違ってくるのではと考えている。

#### 【NPO 法人 NEXTEP】

中山：昨年も島津さんが参加されて、いろんな制度も上手に使いながら拡大されている。今年も新しいチャレンジをされるんだと思って発表を聞いていた。プロフェッショナルとして課題解決に取り組んでいるので、目標の部分が～できるようになる、～という体制を作るという表現になっている。それを通して子ども達がどう生きていくのか、どうあるのか、という部分がちょっと見えにくいと感じた。どういう地域でありたいのか、子ども達にどういう人生を生きてほしいのかというビジョンをもっとはっきりさせていくと、そのための活動も具体的に見えてくると思う。制度の場合だと、こうするということがはっきり決まっているので、協力する人もしやすいという面があるが、今回のような緩いネットワークや、いろんな人の協力ということになると、同じ夢を見ていくということが必要になる。協力していく人たちと、子ども達にこうなしてほしいという夢と一緒に見られるようなビジョンを伝えてもらえるといいのではと感じた。

佐々木：正直なところ、ここ1週間くらい実際に事業が動き始めようとして、シェアハウスや学習支援、子ども食堂の事業では、具体的に話が動き始めて進んでいくイメージができていますが、個人のネットワークという事業は、具体的にどこまで声をかけてどう進めていけばいいのかわからない、自分の中で整理しきれていない。丁度、久遠の若い女性スタッフにストーカーがいるという問題が生じており、何でもかんでもオープンにすればいいというわけでもないと感じており、ネットワークも安全安心に広げていくか、囲いすぎても広がりを阻害してしまうし、どうバランスをとるかが課題と感じている。

中山：自分たちも、子どもの居場所づくりをやっている、まさにそういう問題を感じることもある。(駄菓子屋の学生ボランティアの事例)いろんな人が関わる時に、この場って何のための場なんだろう、というのが見えていないと関わる人同士の意識のずれが出てくる。大きなビジョンとして「子どもたちが自由に来られる場」ということに基づき話し合いが進められていた。そういう話し合いが自発的に生まれるようにするには、やはり大きなビジョンが大切になってくると思う。

#### 【株)南阿蘇ケアサービス】

五味：先日南阿蘇を訪れてそば道場に行ったらなくなっていたので驚いたが、偶然にその跡地が活用されコミュニティの拠点となると聞き嬉しく思った。今までの経験を活かして事業を進めていかれると思うが、どのようにコミュニティの中心になっていくかと考えたときに、利用者さん以外の、地域の人たちにとって開かれた場所、腹を割って話せる場が必要だと思う。アンケートを取りながら進めるというのはとてもいいと思うが、どう実施していくのか具体的にお聞きしたい。

	<p>松尾：地域食堂を開催しようと思っているので、そういうときに参加者にアンケートを取りたいと思っている。具体的には、健康体操体験をして、そのあとEスポーツ体験会をして最後に地域食堂として(お弁当など)配布するようなイベントを考えている。</p> <p>五味：アンケートを取るというのは、声を拾うという点でも大切だが、かかわってもらえる人を増やすという面もある。幅広い人たちにアンケートを取ることで、取り組みを知ってもらえるということも大切。事業所と利用者との関係だけで、地域との繋がりがないとコミュニティとして役割が果たせない。地域の人たちをどう巻き込み、ボランティアの人たちと話し合いながら、担い手を作っていくということが必要ではないか。</p> <p>松尾：今、通いの場が24か所あり健康教室などを行っているので、そういうところでこの事業の話をしていこうと思う。</p> <p>【(一社)sol】</p> <p>三島：様々なコミュニティづくりをやっている他の団体の取組を見て、特に心に刺さったことがあれば教えてください。</p> <p>中山：自分たちは福祉事業者をやっているが、この事業を通してスタッフの組織強化をしていきたい。発表の中で、給料をもらう、払う関係にはなりたくないという話があったが、自分たちも給料を介しての関係だけで終わらず、人と交わる中でお互いに受け取るものを大事にしていく組織になっていきたいと考えている。</p> <p>【ワールドフレンズ天草】</p> <p>河合：関わる地域の関係者の広がりがある。ワールドフレンズさんだから持っている当事者の課題感と、ニーズが合っているかどうかを確認しながら進めていければと思う。支援の要請があり、そこに応えていくこれまでの経験がたくさんあるはずなので、団体内部の知見をどう言語化してどう広めていくか、今後も見していきたい。</p> <p>五味：「やさしい日本語」で外国人とコミュニケーションをとるのはとても良い。</p> <p>参照：熊本県外国人サポートセンター(<a href="http://www.kuma-koku.jp/support-center/">http://www.kuma-koku.jp/support-center/</a>)があるが、そういった公的機関に対しても取り組みを提案していいのではないかな。</p> <p>俣野：外国人自らが困ったことや自分達が出た子育て等の情報を発信していけるようにサポートしていきたい。</p> <p>【(一社)オルタナ】</p> <p>河合：農福連携は注目度の高い取り組みだと思う。相談支援者として、公的な枠組みではないところで、誰でも相談支援者になれるための講座を行うということだが、その講座はどのような内容になるか。</p> <p>宮田：地域共生社会やコミュニティ・ソーシャルワーク、農福連携の研修を行う。</p> <p>河合：活動の中で、How to より、How to be が大事になっていくと思う。</p>
<p>分科会 グループ ①</p>	<p>【ゆめの絆∞わらびがみ(童神)】</p> <p>三島：ステークホルダーは、できるだけ具体的に示したほうがわかりやすいので、行政＝子育て支援課、高齢福祉課などより具体的に示したほうがよい。事業計画、ステークホルダーについて解像度が上げられるとより活動やその思いを共有しやすく、わかりやすいかもしれません。関係性やつながりもより詳しく記入する。関係性は一方的なものでもかまわない。</p> <p>【NPO 法人せいしとらんし熊本】</p> <p>団体の今後の課題：アンケートをどこに向けてするのか。その対象について。</p> <p>三島：ステークホルダーとこれからありたいステークホルダーを分類する。そうすると今後つながりたいところやアプローチしたいところが見えてくるので、その対象へ向けてアンケートをとる。関係性を図式化するなかで、関係性の強さは線の太さで示すとわかりやすい。一方的に関心のある状態なのか、双方</p>

	<p>とも希薄な関係なのか。また、対立や葛藤がある関係について 線の太さや点線などを用いて表現してもらおうと良いかもしれません。いわゆる「エコマップ」と言われるものを作ってみるとよい。</p> <p><b>【子育てネットワーク縁側 moyai】</b></p> <p>三島：今回の助成申請で団体がとらえる課題のフェーズが数段上がったと考えて、課題の特定からしつかりと見つめてほしい。その整理ができることで事業の継続性が紐づいてくる。事業も解像度を上げることで、事業計画の見直しなど、プロセスをすすめてほしい。事業について自分たちがやりたいことなのか、社会課題に向き合った事業設計なのか。事業の妥当性について第三者の視点も入れながらすすめてほしい。事業を見直し設計していく中で、それを実現するための、組織は？財源は？といった問いかけが必ず団体内で出てくると思うので、事業、組織、財源を一体的に考えて整理していってもらえたらと思う。</p> <p>三島さんから資料提示「エコマップの作り方」</p> <p>感想や気づき：</p> <p><b>【わらびかみ】</b> 私たちの活動が求められていることが分かっただけに継続していくことを重きに組織の体制を確立していきたいと改めて思っている。このチャレンジを今後活かせる様に、他団体の方々の活動や運営の仕方をしっかり学ばせていただきたいと思う。</p> <p><b>【縁側 moyai】</b> 団体の位置づけ・課題が見えてきて、次につながるよういろんな意見を共有しつつ川のように長く続くようにしていきたい。</p> <p><b>【せいしとらんし熊本】</b> 実行団体同士がつながり、支え合うコミュニティとなればよいと思う。まずは団体の基盤整備から整えていきたい。1年後どう変わっていきけるかという想いで事業に取り組んでいきたい。</p>
<p>分科会 グループ ②</p>	<p>Q:シートへの記入の過程で感じたことなど。(ディスカッション形式で)</p> <p><b>【フミダス】</b>ゴールについて、まだ明確でない点があると感じている。熊本市に関しては、インターンシップを進めていく高校生に多様な受け入れ先が必要だと思っている。これについては、県や市とも話をしているといけな。人吉市に関しては、担い手の着地点が少ないのが課題。拠点を整備し、採用支援事業もこれからいろんな人(行政だけでなく企業側とも)と話しながら進めていく。</p> <p><b>【NEXTEP】</b>対象者というと自分たちが対象とするのは子どもたちだが、子ども達といっても幅が広い。(課題がさまざま)それを応援してくれる大人、理解ある大人のコミュニティを作りたいが、どう進めていったらいいか。全大会で支援する側、される側の話が出たが、久遠チョコレートでもそこから巣立って一般企業で仕事をしている子もいるので、そういう子たちが支援する側に回って関わってくれたらいいと思う。ゴールという意味では、支える大人たちのネットワークについては、最終的には、NEXTEP ではなく、地域の良い大人たちのボランティアのグループができてほしい。例えば、LINEなどで、「〇君がこういうことに興味を持っている、体験したいと言っている」とよびかけて、「じゃあうちで体験できるよ」というように、スピード感のある大人の情報共有ができればいいと思う。NEXTEP が関わる子ども達は、発達だったり不登校だったり課題を抱えているので、学校では得られない経験や、学校の職業体験では体験できる年齢に限られるが、興味を持った時に体験出来たら、そのあとの登校支援になったり、学習の機会も増えると思う。しかし、発表でも話したようなストーカーなどの問題も出てきて、安心安全なコミュニティをどう作るか、難しさを感じている。</p> <p><b>【フミダス】</b>児童養護施設の子どもの就労支援にもかかわった経験があるが、その子ども達にも、社会に出てどうキャリア形成していくか、支えるコミュニティには拠り所が必要だと感じている。そういう意味では NEXTEP は中心としてかかわった方がいいのではないかな。</p> <p><b>【NEXTEP】</b>ボランティアしてくれる人を集めるだけでなく、ボランティアコーディネートする人が必要かなと思っている。他の採択団体の発表でも、そういう支援者を増やすという事業が多いのも、そういう点で共感している。支援の制度があっても、放っておくと支援に繋がれない人たちなので、つなぐ役目が必要。</p> <p><b>【南阿蘇】</b>自分たちの場合は対象者が広いのでどう絞るかが課題。地域には他に活動をしているような団体がいないので、自分たちがいろいろなことをやるしかない。地域食堂などもやっているところがあれ</p>

	<p>ば連携できるが、ないので主体となってやるしかない。まずは居場所として拠点をうちで作る。全大会での発表を聞いていて、支援される人とする人の境界をなくすという話で盛り上がっていたが、自分たちとしてはちょっとイメージが湧かなかった。自分たちは今は支援する方だという意識でやっている。年を取ったら支援される方になるのかもしれないが、今支援されている人が、支援する方になるというイメージが湧かない。ボランティアの話も出たが、自分たちもどこまで任せていいのか手探り。若者のボランティアなども育てたいが、そもそも若者が村にいない(笑)高校がないので、中学を卒業すると熊本市内などの高校に行き寮に入るのが当たり前。</p> <p>【フミダス】確かにボランティアはやれる範囲に限られる。できるときにしかできない。「世界の偉大なるNPO の条件」という本はとても参考になると思うのでお勧め。ボランティアも巻き込む工夫が必要かもしれない。若い人を外から呼び込むような仕掛け。たとえば自分たちも人吉で拠点にしようとしている場所の上の階を、長期滞在できる施設に改修する派内も出ている。安い料金で宿泊でき、その代わり、そのビルに入っている会社や連携企業などで滞在期間のうち数日を働いてもらう。そうすると、自然とインターンシップにもなる。仕事のコンビニという事業の話も聞いたことがある。ボランティアしたい若者がリサーチするとマッチングしてくれる。若者がいないなら呼べばいいのは？先ほどの発表のときにも話があったが、出口戦略として考えていく必要がある。</p> <p>Q:最後に3か月後の研修で、またこの分科会の場でどうなっているか。どうい話がしたいか。</p> <p>【NEXTEP】やりたいというイメージはあるけど、まだざっくりしているので、周りの人たちに声をかけて10人以上集まってもらって、意見を出す場を作りたい。ビジョンなどについても話したい。</p> <p>【フミダス】3か月後だと、すでにインターンシップの研修はやっている。来年度以降の動きも考えていかななくてはいけない時期。3か月で情報収集を進めたい。</p> <p>【南阿蘇】9月25日に1回目の地域食堂を予定している。24日の研修ではまだ開催の報告はできないが、準備段階で地域のキーマンをピックアップして、進展をお伝えしたい。</p>
<p>分科会 グループ ③</p>	<p>※団体ごとにアドバイザーと個別相談形式、各団体の感想を抜粋</p> <p>【(一社)sol】</p> <p>中山:五味さんと話しながら、ビジョンの共有を再度フォークスクールの方として、賛成して下さる人だけではないので、どうやっていくのかについて大きな気づきを得た。場づくりというのはただ場を作るだけではなくて、人間関係を作って、「あの人に会いにいきたい」と思える場になるのが場づくりなので、地域の人の声を聞きながら、自分達も一緒に成長していきたい。</p> <p>【ワールドフレンズ天草】</p> <p>俣野:対象者の困り感やニーズをどう拾い上げるかの話五味さんとさせていただいた。気軽に来れるカフェをしてきたが、日本人がたくさん集まってしまうと外国人の方が自分達の居場所じゃないと感じてしまったり、同郷の人が集まると、あの人が行くなら行かない、ということが起こったりして難しかったが、たとえば「浴衣を着ます」「この国のこの料理を食べます」というように目的を具体的に絞ったイベントを打つことで、対象者を絞っていくことができて本当のニーズを持つ人に来てもらうことができるのではないか、という見通しを持つことができた。対象者の困り感やニーズをどう拾い上げるかの話五味さんとさせていただいた。気軽に来れるカフェをしてきたが、日本人がたくさん集まってしまうと外国人の方が自分達の居場所じゃないと感じてしまったり、同郷の人が集まると、あの人が行くなら行かない、ということが起こったりして難しかったが、たとえば「浴衣を着ます」「この国のこの料理を食べます」というように目的を具体的に絞ったイベントを打つことで、対象者を絞っていくことができて本当のニーズを持つ人に来てもらうことができるのではないか、という見通しを持つことができた。</p> <p>【(一社)オルタナ】</p> <p>泉:自分も宮田さんも農学部出身で福祉の仕事をしている。二人とも「農福連携」ということで水を得た魚のように楽しくやらせてもらっている。2年前から農福に興味がある人との関係を築けているので、週2回くらい手伝いに行かせてもらっている。先週手伝いに行った時におにぎりを結んでみんなで伺った時に本当に楽しい笑顔が溢れる時間で、農業を真ん中に置いたコミュニティの手応えをすでに感じている。これが全国に波及していくことを夢見て、事業を進めていきたい。</p>

	<p>【やっちろ保健室運営協議会】</p> <p>蓑田：五味さんとお話しさせていただいて、地域の人との繋げ方についてお話した。継続するには収益がカギだということで、五味さんにアドバイスをいただいた。</p>
<p>アドバイザーよりコメント</p>	<p>五味：今回お話をいただいた時、自分でいいか、ととても悩んだ。場づくりをしている実践者としての話をしてほしい、ということで、それならと思って、お引き受けした。みなさん素晴らしい活動をしている方々で、自分自身も勉強になった。場づくりをしていくときに、いろいろ悩み、壁にぶつかった時に大事なことは、原点に戻ること。なんで自分がこれをやっているのか。これをやって、自分が幸せになるかどうかが一番大事だと思っている。やっているうちに活動が広がって行って、それをやっている自分が楽しい、いろんな人とのつながりが嬉しい、ということが原点になっている。仕組みづくりがわからない、信頼関係づくりが難しい、持続可能な財源的な問題など、メンバーと共有し、情報共有しながら進めていけたらと思う。</p> <p>河合：それぞれにコミュニティについて語るとき、抽象的になりがちなので、きちっと見ている現場に立ち帰ることが重要だなと思った。常に現場で話す。そして研修のような全体で話す場では、一段抽象化して話す。その往復が大事である。各団体と私たちのチームの仲間できていくといい。引き続きよろしくお祈いします。</p> <p>三島：社会課題解決に携わるときに、楽しそうかどうか大切だと思っている。今回皆さんの発表や分科会の様子から、笑顔でよかった、いいスタートが出来そうだと感じた。今年度は大きな規模の事業を短期間でやらなくてはいけないので、設計の見直しなども必要になってくるかもしれないが、組織作りや次年度以降の継続に必要なお金についても向き合ってほしいと思う。</p> <p>上野(JANPIA)：今は採択が決まり、事業がスタートしたところであるが、発表を聞き、やりたいことや夢が広がっていると感じた。しかし、今回は期間も限られているので、やりたいことでも取捨選択が必要になってくるかもしれない。事業の目的や1年後の姿を考えながら選択してほしい。</p>
<p>まとめ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第1回の集合研修ということで、採択団体の初顔合わせ。前回の事業以上にリアル参加者が多く、オンライン参加者・アドバイザー・スタッフを入れると総勢44名となった。顔を合わせながらのリアル開催はやはり大事である。</li> <li>・採択実行団体に採択証書授与を行った。</li> <li>・まずはブラッシュアップした事業発表。10団体の発表は所要時間がかかり、その後の時間調整が難しかった(第1回目なのでどうしても必要なことではあるが)。最終審査会での発表経験もあり、全団体時間内(8分)での発表。時間通り進行ができ素晴らしかった。今後も定期的発表をお願いすることになるが、自団体の発表・他団体の発表を聞く機会は団体にとっても貴重な体験となるはずである。</li> <li>・実行団体が行う「評価」について基本的な事項について。外部アドバイザー河合氏に講演いただく。参加者アンケートからも大枠の理解はできたようである。緊急枠は「事前評価」「事後評価」を行うことになっているが、3か月の集合研修の発表の中で、必然的に「評価」を行うことになっていくので、基本的理解は必要であると考え、研修内容に組み込んだ(事前に「実行団体向け評価ハンドブック配布)。</li> <li>・グループワークは3つのグループに分かれて、事業テーマである「多様なコミュニティづくり」「コミュニティ」について団体がどのくらい把握・考えているか「ワークシート」を使いながら行った。参加者アンケートからは他団体の発表などから学びになったという意見とともっと時間が欲しかったとの声もあった。次回の集合研修では集合研修では他団体との意見交換やアドバイザーからのアドバイス・交流など時間配分を考えたい。</li> <li>・研修後のアンケートから、システムの操作についてもう少し丁寧な説明が欲しいとの声もあった。別途勉強会など対応を考えたい。</li> <li>・事業開始にあたって、貴重な一日を使つての集合研修。内容・時間配分など、実行団体・アドバイザーの皆さんの声を聴きながら、事務局内で検討して行っていく。</li> </ul>

## 第1回集合研修の様子

採択証書授与式



全体会



分科会



全体会

